特54-556
1200800240194
155
295

松の志つく

全

始

松の志つく

間宮の八十子の身まかりぬる時よめる

華頂宮御息所　郁子

ことのはのをしへのおやとたのみしにさらぬわかれとなるそ悲しき

かたらひしきのふやうつゝけふや夢ねてもさめてもわすれかねつゝ

久邇宮姫君　榮子

ちりぬとも花はまたさく春もあらんかへらぬたひにたちしひとはも

正四位　南部利剛

なきかすにあはれいりぬる君ゆゑにいくそのひとかみちまとはする

従四位　南部利恭

かたらひてまなひのおくもとはましをあはれこのよにわかれぬる哉

南部菊子

きのふけふきえんものとはしら露のしらぬうきよそかなしかりける

東京書籍館

なけゝとも今はかひなき水のあわのきえてふたゝひかへるともなし

南部麻子

をさな子のちふさはなれしこゝちしてとゝめもあへぬ我なみたかな

南部瑩子

今さらにさらぬわかれのをしまれてきみいまさはといはぬ日そなき

蜂須賀隨子

しるへせし人におくれてたゝひとりわけそわつらふことのはのみち
かくはしききみかことはの花をのみちりにしあとのかたみとはみん
君か名の八十路のさかはこえもせてかへらぬみちになにいそきけん

松平幾子

ことのはのみちのしるへをさきたてゝゆくへもしらすなけくころ哉
ちきりにしそのことのはもうたかたのあわときえにし君をしそおもふ

松平節子

花もさきかりもまたこんはるはあれとかへらぬ君かけふのかと出や
いかにせん君にわかれていまよりはたれにとはましことのはのみち

松平さと子

水くきのあとはのこれとかけをたにとゝめぬけふそかなしかりける

松平まさ子

しての山ひとりこえゆくきみゆゑになみたのつゆをたむけにそする

松平・とも子

かへりこぬ君かかとてやいかならんおもひやるたにかなしかりけり

秋田あつ子

さためなき世とはしれともきのふけふ雲かくれんとおもはさりけり
しきしまのみちのしるへの君なくてつゐにはなれしこゝちのみする

佐竹愛子

もろともにきゆるはかりのこゝちしてなみたひかたき袖そかなしき

松平ふち子

きのふまてよにあるものとみし君のけふはむなしきあとをとふかな

うつゝともゆめともわかすうつせみのよになき君をしのふけふかな

西谷つね子

いのりつる千とせの山はかへりみすよもつひらさかこえしきみはも

をしへてしそのことのはをくりかへしとふへき人のなきそかなしき

秀島柏子

かへるかりなれもあはれとなきぬらんかへらぬ君をおもひつらねて

しきしまの枝折をかへてかへりこぬ死出のたひ路になといそきけん

小谷貞子

今日よりはたれをたのまんことのはの道のしるへのなきそかなしき

をり〳〵の月よはなよのことのはもいまはかたみとなるかかなしさ

鈴木利せ子

たらちねのおやにわかれしうなゐこにまさりてまとふわかこゝろか

かへるかり君かとこ世にしるへせよゆきてとはまししきしまのみち

横田敏子

しきしまのまなひのみちのすゑかけてたのみし君のなきそかなしき

けふよりはたれにたよらんしきしまのみちしるへせし君にわかれて

高橋きん子

かくはしき君かをしへのあとたえてたとりわつらふしきしまのみち

をしめともかへらぬ君のしのはれてなみたにぬるゝわかたもとかな

齋藤昌子

いにしへのありのこと〳〵へたてなくかたりたりしも夢のまにして

幸崎康能

なもたかく世にふる君れあわゆきのきえぬときくそかなしかりける

成瀬氣能砥

しきしまのふみのはやしにひかりのみのこして月のなとかくれけん
従五位 鈴木重嶺

君か名のやそちこえんとおもひしをよみちにいそしけふのかなしさ
本居豊穎

ことのはのはやしにたてるひめまつのなかの老樹とあふきしものを
小杉榲邨

おほかたの野山のうめにさきたちてちれとのこりしかやはかくるゝ
會田安昌

なかゝりし人のうつゝもはるの夜のゆめこゝちしてはかなかりけり
三浦千春

おもひきや百八十とこそたのみしかなゝそちをたにまたさらんとは
江刺恒久

はるかすみたちにかれにしかりならはまたこん秋をまたましものを

ことのはのみちをはおきてなにしかもかへらぬ旅におもひたちけん
中島よしかつ

けふよりはいつくのみちかたとらましことはの花のしをりなくして
山田純

をしへくさ今さらみちのしをりたになみたにくもるはるのよのきつ
高平静濟

ともによみむ人もなければことのはるははなおそしともおもはさりけり
南部晴景

しきしまのみちふみまとふこゝちしてみちひかれにしよをしのふ哉
相羽恒

しるへにとたのみし火かけ消はてゝゆくさきまとふしきしまのみち
河村重子

春なから又さえかへるあさしものきえてかなしきけふにもあるかな

みはふりのわさはてゝかへるみちに

いまはとてかへるみちにも君かそのこけのしたこそかなしかりけれ

有住 齊

うたかたときえにしかけのしのはれて山田のかはすこゑたてつなり

豊田ふゆ子

あはれわれかたらんすへもいまはよになき君としもなりにけるかな

君しのふそてのなみたにあたらよのつきかけさへもくもりかちなる

永好大人の墓にならへ葬る時　　魚住長胤

ならひたつおくつきみても有し世はいつれおとらぬいさをとそしる

君かゆくよもつひら坂おひしきてよひかへさはやとおもひけるかな

間宮の八十子をいたみて　　正四位 南部利剛

むねとたのめる人は世をはやうさりぬること、ちす、あはれはかなきはひとの世にこそありけれ、もゝたらす八十子の刀自、このころ草つゝみ

のやまひにかゝりて、とみに世をさりぬときけは、たゝにむねつふれていとくゝし、この人やしきしまのみちひろくすくれたるさえのほとは、世に數多の歌人あれとも、この刀自の右にいてん人あるへからす、さるをなき人のかすによまるゝは、くちをしともいふもことゝわりなりと、かしの實のひとりこちして、人しれすかなしさに

今さらにいかにかせましゝきしまのみちの行てのなかきわかれを

南部明子

かなしくもくやしくもあるかな、八十子の刀自はわかものまなふをしへのおやにしあなれは、とし月あまたなれしたしみて、きこえかはしつる文の上のことはいふもさらなり、なにくれとひつることに、森野の草のねもころにをしへみちひきつゝ、まめやかにうしろみつれは、女子とも、おなしをしへ子とたのみきこえたり、さるをちかきころはやまひかちになりつれと、時々とふらひ來るを、いと〳〵たのしとこそまち

わたりしか、としあらたまりては、うちふしかちにておはしけりときく
に、いとこゝろもとなく、せめては七十のよはひのふきことをといのり
しもそらたのめなり、あはれまかつひの神やみちひきたまひけん、おも
はぬたひにたちわかれにきと、玉つさのつけたりしかは、ひとたひはお
とろき、ひとたひはかなしみ、ゆめかうつゝかとあきれにあきれて、なて
ふこともおほえす、ありしよのおもかけのみめのまへにみゆるこゝち
すれは、涙のあめのふる言草かきあつめて、袖もほしあへすなん

としの月のふかきをしへのおやとこのわかれの袖はひるまたになし

おなし時によめる歌

あら玉の年とゝもにも、をたまきのいや遠なかく、たまほこの行かひし
つゝ、しきしまの學のみちの、みちひろき世々のまき〳〵、白露のこゝろ
もおかす、わかくさのねもころ〳〵に、敎へつるこゝろつくしは、はても
なくかきりもあらねは、こゝろもてのひたちのうみの、わたのそこふかき

めくみを、つくはねのたかくあふきつ、大ふねのたのみしものを、あなく
やしいかにおもへか、はるのきてころもきさらき、たちまちの月もかく
るゝ、山のはのあかつきやみに、あはれよをそかひになして、そら遠くか
へらぬみちに、たひころもたつとしきけは、ゆめなりやうつゝなりやと、
ふししはのふしてはなけき、しら露のせきてはしぬひ、くれはとりあや
めもわかす、ころもてをかへす〳〵も、なかきよのわかれかなしみ、こひ
わたるなみたのあめは、ひるよしそなき、

反歌

ことのはの悲しきたねをのこしおきてなき人かすにいりし君はも

池田慶子

君をしき島のやまと言のはの師といはけなき時よりうちたのみてあ
りしかは、何くれとなくをしへみちひき給ひしも、このとしころ事にま
きれつゝ、おこたりがちにすきにしを、去年の夏のころよりいたつきた

ゝならすおれしけるが、冬の頃よりいたくよわり給ひしも、神のみいつ
いちしるくて、又たひらかになり給へは、いともかしこうれしくて、お
こたりたまはんをまちわたりしに、つひにそのかひなくて、遠きよみち
にたびたちしたまへる事のかなしうくやしうて、

今もなほゆめにゆめみる心ちしてきえにし人のしのはるゝ哉

もゝよにと思ひし君はとゝまらてかへらぬ旅に何いそきけん

池田住子

わか師の君はしも、御よはひのつもりにや、このふたとせ三とせともす
れはあつしうなやませたまひぬるを、いかならんとこゝろもとなくお
もひつれと、いとくしき大神の御恵みに、ことなくさはやきたまひぬれ
は、いとうれしくて千とせもかもとねきまつりつゝありしに、こ
としまたなやませたまひぬときゝ、おどろきてこゝろもそらに行とふ
らひてまみえつるに、こたびはかぎりなめりとおもひしを、またしも、大

神のみいつによりて、おこたりざまになむとて、よわけには見え給ひな
から、なにくれと物かたりしたまへは、いとうれしさいはんかたなく、ま
たもとてかへりつるのちも、こゝろもとなくてとふらひきこえつるに、
日々におこたりたまひぬときゝて、いとたのもしく、やかてさはやぎた
まひぬらんと、やゝこゝろやすくおぼえつるほどに、またもなやましう
したまふなりときくこゝちいはんかたなし、されとさき〳〵もおほ神
のみめくみにかけとゝめたまへれはと、せめてこゝろつようおもひな
してたのみつゝ、御ありさまをとふらひぬるに、こたひはおなしさまに
のみものしたまふなりときゝて、いとこゝろもとなし、さえかへるあら
しのおとも、みやまひにさはりたまふらんと、こゝろうくてとくさむさ
のゆるひなは、いさゝかは、おこたらせたまひなんとおもひやりつゝ、た
のみたりけるほとに、けさしもはかなくみまかりたまひぬと、たまつさ
のたよりにいひおこせつれは、むねつぶれこゝろまとひて、さらにうつ

いともおぼえず、かきくれて
ふりとふるなみたの雨に天かけるみたまをひてかへらましかは、
君の名の八十路こえよとみしめなは掛しもはかなそらたのめにて
つねにみやまひかちにおはしつれと、さりとも七十路はこえたまふ
らむとおもひたのみつゝ、きのふけふかたるへしとはおもひきや露こ
ゝろもおかてまめやかにみちひきたまひにしことのはくさを、いたつら
につきぬとし月のおこたりを、とりかへすものにもかもと、くやしさや
らむかたなく、よにたくひありかたかりし御さまを、なへてをしみきこ
ゆるかなしさはさらなり、をしへ子の身は、今おくれまつりて、なほ行さ
きをいかにたとらまし、とふたかたにまとふこゝろは、さらにゆめうつ
ゝともわかず、かきくるゝやみちにそてのみぬれて

君まさて今はとかるゝことのはにまなくもかゝるそてのつゆかな

ふみまよふわかしきしまのみちを君天かけりてもあはれとはみよ

千代浦ゆり子

間宮の八十子の君は、こゝろはへをゝしくさえたかくてしきしまのみちの學ひひろくおはしけれは、をしへ子あまたある中に、かすならぬわかみもとしころ師とたのみつゝ、はかなきことのはも、かにかくとねもころにをしへみちひきたまへるうれしさに、いさゝかよみならひたれと、おろかなるみのかひなくもをしへたまへる千々のひとつもまなひえす、こたび君にわかれてけふよりはたれをちからにこのみちをたとらましと、こゝろのやみにまとふかなしさを

かきりなき君かよはひとたのみつる我おこたりのけふの悲しさ

かけひろくたのみし人の袖ことにゝほひのこしてちりし梅かな

このはるを別れとしらは鶯のこゑのかきりをきかましものを

矢村たみ子

あめにます神のめくみもあらさりけん、こたび八十子の君の身まかり

たまへるときくにむねいとふたかりて、志き島のみちの光をさへうし
なひつる心ちなんしはへるげに柳のいとの心ほそう、くりかへし〳〵、
をしうもくやしうもなつかしうもおもうたまへられはへれは、せめて
みじかきことの葉をたむけばやとおもひおこせど、老の身のおろかさ
のさがとて、春の夜のおぼろげならんもつゝましくてなむ、

君かゆくみさきの露をはらひてもとはまほしきは敷島の道

君の名の八十瀬の波のよるまでとたのみしかひもなく〳〵そふる
老の身はおくるゝよりもゝろともにこの世の岸をはなれてしかな

久米幹文

はゝしろの君にわかれていたつらになくこのみこそかなしかりけれ

久米志つ子

くりはらのあねはの松はかれにけり千代のさかえとなにたのみけん

鈴木とは子

あけくれに千代ませ君といのりにしかひもなみたにくるゝけふかな

久米鷲雄

志きしまのやまとことはのよしきのみかへらぬ旅のよそひとやなる

久米わか子

志きしまのみちの志をりをいかにしてしての山路にふみたかへけん

鈴木すず子

あはれ〳〵たのみし君のきえしよりそてのなみたのかわくまそなき

同　ぎん子

なき君をおもひいたせはかなしくてゆめかとはかりうたかはれつゝ

間宮好子

かへりこぬみちとはかねて志りなから今さらゆめのこゝちのみして
なきからとおもひなからも皆の下にうつめんことそかなしかりける

間宮さと子

あけくれにうちかたらひし言のはもなかきわかれのかたみなりけり

千代までとおもひしものを今さらにふちのころもをきるそかなしき

綾井すか子

しらぬまにさきたつ人のかなしさよみちのしをりとおもひしものを

明治廿四年三月十八日間宮八十子を葬る時の詞

あはれ此家の老木の松の千年の蔭とあふき奉る間宮八十子の命(ミコト)のみたまの前に申さく、汝が命ははやく江戸の小石川の水戸の屋敷に生れ給ひしか、文政六年六月の廿日なりき、幼き時の名をきんと云つるを、後に八十子と改め給ひ、家にありては父母によく仕へまつり早くより古(フル)事の學を好み給ひ、年十七の時より水戸の贈大納言殿に年まねく仕へ奉てありしを、母君の病に依て暇を乞ひて家にかへり給ひ、なほ學の道をいそしみつとめて後、年三十の時、間宮永好大人に嫁(トツ)き給ひ、もはら學のわざをつとめ給ひて、あまたの教子をもち給ひしかは、其名も世にしられて、人みな汝が命をたふとびつるに、永好大人の身まかりて後、先妻の女に資朗ぬしを養子としてめあはせ給ひ、三人の子さへありつるを、資朗ぬし身まかり給へは、その子どもを養ひ立つゝ、家の内の事をとゝのへ給ひてこゝらの教子をみちびき給ひしは、ますら男にもまさるい

さをと云へし、かく家のため世のためと心をつくし功を立たまひておはしつるを、うつし身ははかなきものにて、この二月十七日を一世の限りと、玉きはるいのち絶て、あたらこの世をまかりませは、まことにせんすへなき世のならひにもありける、故(カレ)かなしみをしめともかへらぬ事にしあれは、式(ノリ)のままに神はふりをさめまつるとして、柩の板はあつくつくりそなへて、なきがらを谷中の玉林寺のおくつきの所にはふりをさめ奉らんとて、禮代(ヰヤシロ)の物と御酒(ミキ)御饌(ミケ)くさ〳〵の物らさゝげまつりおきたらはして、うからやからもろ〳〵、玉ぐしのとり〳〵に、永きわかれをつげまつりをろがみまつる事のさまを、たひらけくやすけくきこしめせと、齋主權少敎正西久保孝始かしこみ恐みもまをす

十日の祭に申せる詞

あはれうつ蟬の世ばかりさためなき物はあらず、人のいのちばかりたのみがたきものはなかりけり間宮八十子の命は、親族(ウカラ)やからの心には、

百年千年もかき磐にとき磐にさかえませと思ひたのみてありしを、この月の十七日をうつし世のかぎりとして幽冥(カクリヨ)におもむき給へれは、いとも悲くいどもうれたく、追(オ)ひしきて引かへすへきすべもあらんには、百たらず八十のくまてもおちず、尋ねまつらまく思ひなげけともかひなし、故(カレ)せめてははふり式(ワザ)うるはしく仕へまつらん、後の祭をもたらはぬ事なくしてましと、うからやから相はかりあひたすけて、心の限り仕へまつりても、なほ心やすまらず、くやしきかも悲きかも、見るもののきくものにつけて、思出てこひしのひつゝあるほどに、今日ははやくも十日のまつりになりぬれは、いとゞなげきの霧にむせびて、袖のみぬれまさるを、つら〳〵に思へは、汝(ナ)が命はうつし世にいましゝ間は、神をゐやまひ人をいつくしみ古事の學をいそしみて、世のため家のためと、はかり給ひつくし給ひし心を、かくり世の大神もほめたまひめて給はん事を、祈りまつりつゝ、靈をゝさめまつらくを、見そなはし給ひて、此家の守り

露光量違いの為重複撮影

神といつかれまして、子孫の八十つぎ〳〵よおなゝひ給へと、禮代(ヰヤジロ)の幣
の物さゝげ奉て、齋主權少敎正西久保孝始かしこみ〳〵も白す、

明治廿四年四月一日印刷幷出版

編輯人　本郷區駒込西片町十番地寄留
茨城縣士族　久米幹文

印刷兼發行人　本郷區元町一丁目六番地寄留
兵庫縣士族　魚住長胤

仝所　稽照館刊行

露光量違いの為重複撮影

神といつかれまして、子孫の八十つぎ〳〵よゐなゝひ給へと、禮代（ヰヤシロ）の幣の物さゝげ奉て、齋主權少敎正西久保孝始かしこみ〳〵も白す、

明治廿四年四月一日印刷并出版

編輯人　本郷區駒込西片町十番地寄留
茨城縣士族　久米幹文

印刷兼發行人　本郷區元町一丁目六番地寄留
兵庫縣士族　魚住長胤

仝　所　稽照館刊行

終